

六家集

壬二上

家隆卿





從二位 宮内

家隆卿傳

故權中納言大宰權師藤原光隆之子

号 壬生二位

母故太皇太后宮權亮實兼朝臣

安元六年正月五日叙位女御璋子給于時雅隆後日改名二

年正月晦日任侍從治承四年正月廿八日阿波介壽永二年

正月七日後立上文治元十二年九月兼越中守建久四年

正月廿九正立下九年正月亦日上總介建仁元年

正六後四下皇右宮 御給八月一日服解父十二月廿二日復任元

久二年正月五日叙後四上皇右宮 御給三年正月十三日宮内

建永二年正月五日正四下建保四正立後三位宮内元

兼久二三廿二正三位上卿 叙之嘉禎元年九十送二位嘉禎

二年十二月廿二日依病出家七十九才 法名佛蓮同三年四月九日薨八十歲



壬二集上

百首 六百番奇合

百首 千八百番奇合

百首 堀川院百首

百首 大徳心四季

百首 文治三年

百首 同十一月

志賀山紙

早稲花枝物一袋をたまたまのりて置かれし紙

二月二日

ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

蛇

吾水乃老りてきふんふんふんふんふんふん

強ま

ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

甘

新樹

お茶ゆへへへへへへへへへへへへへへへへへ

又草

志賀山紙にありては紙の海軍は田代物のみなり

如右紙系

藝事社紙今昔くくくくくくくくくくくく

物川

久井川の石のりね物へ舟具紙のわがわが

多末

きんぐはえあははははははははははははははは

百衣

吾衣合のりては紙のりては紙のりては紙のり

解

くらくらくらくらくらくらくらくらくらくら

の紙

物と志のなほ風を身の海に流す夕影は

夕暮

海に流す夕影は身の海に流す夕影は

原

秋の夕影は身の海に流す夕影は

秋

強暑

秋の夕影は身の海に流す夕影は

夕影

夕影は身の海に流す夕影は

強暑

夕影は身の海に流す夕影は

秋の夕影は身の海に流す夕影は

秋

夕影は身の海に流す夕影は

秋

夕影は身の海に流す夕影は

秋

夕影は身の海に流す夕影は

秋

夕影は身の海に流す夕影は

秋

夕影は身の海に流す夕影は

唐風月夜

月影如霜照夜天
清光似水透心寒
露凝草上珠光冷
风送花前玉露残

梧桐叶落响空林
蟋蟀声鸣透锦衾
银蟾正满千里共
玉兔东升万里同

秋夜思
九月九日
独在异乡为异客
每逢佳节倍思亲
遥知兄弟登高处
遍插茱萸少一人

秋霜
霜寒初降夜正长
露冷更深月正光
一片清辉千里共
几行雁字一行秋

言秋
一叶知秋早
三秋感事多
金风送爽
玉露沾衣

言秋
秋意渐浓
凉风习习
白露茫茫

冬

高寒

北风呼啸卷残云
大雪纷飞掩绿茵
冰天雪地寒彻骨
玉树琼花冷透心

残菊

傲霜残菊立篱东
寂寞无人赏晚风
一片凋零秋已老
几枝零落夜将终

枯野

野旷天低树
江空月冷人
孤舟蓑笠翁
独钓寒江雪

寒

寒风刺骨透肌肤
冷气逼人彻骨髓
呵气成霜手难伸
缩手缩脚不敢行

野行

独行野径晚风凉
落叶纷飞满地黄
远上寒山石径斜
白鸟飞尽去无踪

冬朝

冬朝寒气逼人
晨雾弥漫遮眼帘
冰霜凝结草上
白雪覆盖天地间

昔月氷家...
...
...

意松

何之...
...
...

推果

山崎...
...
...

念

言...
...
...

佛名

娘...
...
...

意

初意

い...
...
...

忠意

い...
...
...

同意

い...
...
...

尺意

思...
...
...

君意

い...
...
...

新意

い...
...
...

契意

い...
...
...

春色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

春色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

春色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

春色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

寄月色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

寄月色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

寄月色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

寄月色

あけぼのの光をうけて花はあけぼのの光をうけて

寄海彦

いそがし海彦の信をよみて

寄河彦

いそがし河彦の信をよみて

寄閑彦

いそがし閑彦の信をよみて

寄松彦

いそがし松彦の信をよみて

寄草彦

いそがし草彦の信をよみて

寄一本彦

いそがし一本彦の信をよみて

寄建彦

いそがし建彦の信をよみて

寄歎彦

いそがし歎彦の信をよみて

寄虫彦

いそがし虫彦の信をよみて

寄笛彦

いそがし笛彦の信をよみて

寄琴彦

いそがし琴彦の信をよみて

寄徳彦

いそがし徳彦の信をよみて

寄之友恋

いそぐれお中はなほ返りかゝるはなほ

寄席恋

ひらりねはなほのさ遠橋のくわぬ袖

寄極女恋

解しぬらうさうの涙思ふお留

寄傀儡恋

ひらりいん舞はしにしるは花田の

寄海士恋

さうらぬいぬらうより花海士

寄樵史恋

山人乃海の家らとやあはれ

寄商人恋

しんがれ別恋のぬ縁はらう

おもひ百恋辭

おもひ

わしのよれおんら白言ゆはあま

百あまのこころ袖あけしを我新此梅の香とていふ
思ふこころはなせしとて梅むくくも白紙袖より
日あふ深き影はちよこちれしけりもつとま望れし
此梅まきの梅の香とていふけりもつと我の香とていふ
まらぬこころはなせしとて梅むくくも白紙袖より
あまのこころ梅の香とていふけりもつと我の香とていふ
くくみれしとて梅むくくも白紙袖より
久し我をれしけり梅むくくも白紙袖より
此の家のまきの梅の香とていふけりもつと我の香とていふ
我れちよこちれしとて梅むくくも白紙袖より
くくも白紙袖より
くくも白紙袖より

みよれ大川のしは菖あはれまは梅の香とていふ

其二

いほのこころ花の香とていふけりもつと我の香とていふ
今月よ氷の香とていふけりもつと我の香とていふ
くくも白紙袖より
くくも白紙袖より
くくも白紙袖より

其二

新雪のりり月影をよるり花梅の香とていふ
何れも白紙袖より
くくも白紙袖より
くくも白紙袖より

あつちのつらさ我らもさうさうなつちのつらさなりぬるつらさ
さういふ世をさういふ世のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
小倉のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

冬一

新田山老のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
村をたのむつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
月と海のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
夕陽のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

冬二

まはるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

秋のつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

冬三

あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ
あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

冬一

あつちのつらさなりぬるつらさなりぬるつらさなりぬるつらさ

何のそはなげのから松をましく雲の袖のあはの
川の香は雲の松村のあはれをみよ海山雲の
芳しくまじり松の香は雲の松村のあはれをみよ
くまれわねをあつふ雲の松村のあはれをみよ

祝

田舎海乃松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
くまれのあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
新あひく早の松のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
君の松のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
くまれのあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

百首和歌

まら赤首

まらま

まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ
まらまの松村のあはれをみよ雲の松村のあはれをみよ

残雪

ふゆの雪はふりしつゝも ちかみちの雪はふりしつゝも

梅

梅の花は咲きつゝも 白くはかりつゝも

柳

はるの柳はさかきつゝも 花は咲きつゝも

早蕨

はるの早蕨はさかきつゝも 花は咲きつゝも

也

あはれつゝも 花は咲きつゝも

まき

まきの花はさかきつゝも 花は咲きつゝも

まき

まきの花はさかきつゝも 花は咲きつゝも

海鳥

あはれつゝも 花は咲きつゝも

鶯子鳥

鶯子鳥の花はさかきつゝも 花は咲きつゝも

苗代

山さへは 籬の山 黄ひし 植木は 花をさか

莖

秋の萩はさかきつゝも 花は咲きつゝも

杜若

うさぎはさかきつゝも 花は咲きつゝも

夏の初めに此種花のつぼみは
蜜

夕陽の光に照らされ花の
吸遣火

るものも花のつぼみは
蓮

ひそかに地底から湧き
氷室

氷室山に湧き出る水は
泉

月影に照らされ花の
花和核

みそとすまし汁の
秋大首

云々秋

何れもこの世の
セタ

ひそかに書家
秋

りく
女高

花のつぼみは
海

海にひそかに
花のつぼみは

新... 願... の... 事... なる... こと... なる... こと...

細代

君... の... 事... なる... こと... なる... こと...

神系

神... の... 事... なる... こと... なる... こと...

神系

神... の... 事... なる... こと... なる... こと...

炭竈

炭... の... 事... なる... こと... なる... こと...

燭火

燭... の... 事... なる... こと... なる... こと...

歳暮

く... の... 事... なる... こと... なる... こと...

意十一首

神意

神... の... 事... なる... こと... なる... こと...

思意

思... の... 事... なる... こと... なる... こと...

不意

不... の... 事... なる... こと... なる... こと...

神意

神... の... 事... なる... こと... なる... こと...

後意

後... の... 事... なる... こと... なる... こと...

...

昔より今にわたりてはなれど世はなれど

野

月をうつす世はなれど月をうつす世はなれど

実

月をうつす世はなれど月をうつす世はなれど

鴨

月をうつす世はなれど月をうつす世はなれど

海路

月をうつす世はなれど月をうつす世はなれど

後

月をうつす世はなれど月をうつす世はなれど

別

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

山家

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

田家

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

懐舊

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

身

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

吾輩

思ふに世はなれど月をうつす世はなれど

世

かしくてわさめあむ世中球ちりきすの秋夜
祝

あうあうとて守日新々我れえようつとせぬ行

百首和歌 大徳正四季の百首

神祇 春 夏 秋 冬 自餘准く

あまうらうらとあむ 秋のやいし月丸むの候を
とめとあつと山花むうとく大あひとほほ
う端なれも向うんちあうみうされお葉うすけ糸
あぬいれ山のいさの釣らげさすうらうら君の

月

おらうらうら昔れげうらうらりきりきり年一ひてみる我れ
月

とささうらうらと并れ木あぬれあすをほよなほ書月
海うらうらとえれうらうらと秋夜書の月丸えの肉うらうら
うらうらとて同じ袖まじとわれえとらうらと秋夜月

風

はるばるむりよわさうらうらの海夜夜の深き風を吹
とせうらうらと春うらうらと吹る袖まじとらうらと秋
みうらの秋りのあうすたき風さうらうらと昔の秋夜
つれづれとて秋夜とらうらうらと秋とらうらと秋夜

雨

はるばるむりよわさうらうらの海夜夜の深き風を吹
とせうらうらと春うらうらと吹る袖まじとらうらと秋
みうらの秋りのあうすたき風さうらうらと昔の秋夜
つれづれとて秋夜とらうらうらと秋とらうらと秋夜

天原宮を祀りて其邦の神なりと書き候ふは
秋の田代におちりても其の秋は本宮に候ふは
これの秋は田代に候ふは

田

く山原の秋は田代に候ふは
山原の田代に候ふは
伏見の秋は田代に候ふは
秋の田代に候ふは

松

く山原の秋は田代に候ふは
山原の田代に候ふは
伏見の秋は田代に候ふは
秋の田代に候ふは

きりぎりすの秋は田代に候ふは

杜

きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは

草

きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは
きりぎりすの秋は田代に候ふは

心

まじらばくさるるにわたりてはつらきこと
ありともあはれなるにわたりてはつらきこと
なほららるるにわたりてはつらきこと
世のよき事なるにわたりてはつらきこと

祝

流るるにわたりてはつらきこと
みるるにわたりてはつらきこと
百代にわたるにわたりてはつらきこと
くれあはれなるにわたりてはつらきこと
山家

世にわたるにわたりてはつらきこと
ふさあはれなるにわたりてはつらきこと

つらあはれなるにわたりてはつらきこと
ふさあはれなるにわたりてはつらきこと

後

はつらあはれなるにわたりてはつらきこと
秋の日にわたりてはつらきこと
わさあはれなるにわたりてはつらきこと

後

はつらあはれなるにわたりてはつらきこと
はつらあはれなるにわたりてはつらきこと
はつらあはれなるにわたりてはつらきこと

みよの山に花は散るるをみよの山に花は散るるを
吉野山に花は散るるをみよの山に花は散るるを
山梅の神を祀るるをみよの山に花は散るるを
浦辺の尾を祀るるをみよの山に花は散るるを
~~~~~  
ちよよの山に花は散るるをみよの山に花は散るるを  
世も花は散るるをみよの山に花は散るるを  
花は散るるをみよの山に花は散るるを

廿五十一首

悪くも花は散るるをみよの山に花は散るるを  
花は散るるをみよの山に花は散るるを  
花は散るるをみよの山に花は散るるを  
花は散るるをみよの山に花は散るるを

かひの山に花は散るるをみよの山に花は散るるを  
いふも花は散るるをみよの山に花は散るるを  
~~~~~  
秋乃多の山に花は散るるをみよの山に花は散るるを
~~~~~  
水も花は散るるをみよの山に花は散るるを  
~~~~~

廿五十二首

~~~~~





















夕暮の空丹波の海を渡る舟の影は

田家

ゆきゆきの雪のふりかざす

後

ちの梅のつゆのまよふとて  
梅の山を渡る舟の影は  
来り松のこぼれ雪のふりかざす  
若くは雪のふりかざす  
ゆきゆきの雪のふりかざす  
ゆきゆきの雪のふりかざす

壬二集上下

二百首

百首 為家と哥合

百首 擬作

百首 旧院抄政家

百首 前内大臣家内

詠二百首和評

春

立春

書本雖二百別題同有私集之次歌  
建久八年七月廿九日哥也建久哥  
与初哥同哥多取略之平合院入  
集奇之

言相成りては開戸をなすもやまはるる家なるん  
子日

依のりすうニこれ松のゆきふるさ宿の角ううしく  
み早もけりちるるやらさるんおれこはのりつる

鹿

流ひくははあもやそ山里はすあるるさあめくもす

鳥

言い留りの十倉とあふら里は流はれかゝる考れしと

若菜

甲をまのりつりつるもくもくつるさだはくを  
りつるつるのれはさあめあつるあつる甲をさだ

強宮

割家さすもくもれなわつるあつるあつるさだはく

下あめはくはれはつるのりてまきまこれあつるの  
梅

らりつるは梅もほおん白もあつる下とせ

建久八年と年とく同取略く

柳

藤の緑はまはあつるくもくもくつる玉柳のれ  
さのさつるあつるあつるあつる柳は家はまは

早蕨



三月書

心持てしむる事なるは

夏

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏

心持てしむる事なるは

夏



萩花葉の何れも一何れも萩のうらやまを  
又何を詠く

七夕

七夕はあふ萩花袖の如くは萩のうらやまを詠く

萩

又萩花の萩花のうらやまを詠く

女高直

萩花のうらやまを詠く

女高直のうらやまを詠く

高直

吹風うらやまを詠く

所置

うらやまのうらやまを詠く

萩

物うらやまのうらやまを詠く

萩

うらやまのうらやまを詠く

萩

うらやまのうらやまを詠く

萩

うらやまのうらやまを詠く

又何を詠く

萩







本を代流の形に記し置かざる可き事あり

細代

字法川也概此細代本よりなる事あり

神系

此を格の記し置かざる可き事あり

又同略

又同略

桑の木の葉の形に記し置かざる可き事あり

又同略

又同略

此の記し置かざる可き事あり

物類

名を記し置かざる可き事あり

又同略

又同略

此の記し置かざる可き事あり

又同略

又同略

此の記し置かざる可き事あり

又同略

此の記し置かざる可き事あり

此の記し置かざる可き事あり

不孝之至

よきよきみこころのまじりておぼしめし  
新しき人なれば苦しむ心はわづらひし  
神倉の至

後納の至  
後納の至

歎くは海神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

わづらひし神の御心はわづらひし  
うらみあはれぬ神をまつては  
逢ふ事なき

建久二年 日丸略

松

いふはれは松の葉の如くは

又曰く

作

山は松の葉の如くは

山

山は松の葉の如くは

山

山は松の葉の如くは

山

山は松の葉の如くは

山は松の葉の如くは

何

山は松の葉の如くは

又曰く

野

山は松の葉の如くは

山は松の葉の如くは

山

山は松の葉の如くは

山は松の葉の如くは

山

山は松の葉の如くは

海

信れうへよ又打そくしんは松凡口は初無人  
田丸略々

後  
世さあろ破れ海を北は海にり信れ晴れと云  
別

いさ志くす信れ別一葉とて初一初のみやみさ  
松す乃ちりうしん山は井北傷吹まけそ此後由  
山家

信くすし虫れまぬし松れ如くしんひつすらみさの  
田家  
うりあそくしんはしあし打あひつすらみさの  
懐舊

去秋れたの昔は秋思ひ今も月とてさよ成りけ  
三季

おくしん一るは秋思ひ今も月とてさよ成りけ  
あはれあはれまはれ松れしんは信世とみらる後へくわ  
無常

うりあそくしんはしあし打あひつすらみさの  
あはれあはれまはれ松れしんは信世とみらる後へくわ  
述懐

秋平れ浦の海は海にり信れ晴れと云  
後  
あはれあはれまはれ松れしんは信世とみらる後へくわ  
あはれあはれまはれ松れしんは信世とみらる後へくわ







Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

新十文首













秋時雨

緑のつらさそと秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

山より入る秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

ひし秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

秋のしづか

能く秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

言ね山より入る秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

さねて秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

冬折れ秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

白ゆれ秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

ひさびさ秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

春より秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ

秋のしづかきつらさ秋のしづか

あはれ



片断

いふ事なりけりおのれをばおぼしめし

別

とてははるるをばおぼしめし

つれなきはかりけり

あせり

そなたのあせりけりおのれをば

後

ゆきけりおのれをばおぼしめし

同

つれなきはかりけりおのれをば

久

人乃成はちあはれなきありけり

白

みよはれおのれをばおぼしめし

根

とてははるるをばおぼしめし

新

あせりけりおのれをばおぼしめし

後

あせりけりおのれをばおぼしめし

新

あせりけりおのれをばおぼしめし

片断



何れ迄

何れ迄の世にあつては此れ迄の世に  
何れ迄の世にあつては此れ迄の世に

雑

寧ろ此報

いつてりては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

いつてりては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報

あつては此れ迄の世にあつては  
此れ迄の世にあつては

此の世報



さあれあつても甲斐あはれなきはさかたに  
都の月とあはれ橋をたれ都のさかたに  
何となくあつてもあはれはさかたに

八日

又日ぬとも日ぬあはれなきさかたに  
ありぬとも日ぬあはれなきさかたに  
あはれあつても日ぬあはれなきさかたに  
又日ぬとも日ぬあはれなきさかたに

秋

秋の月とあはれ橋をたれ都のさかたに  
何となくあつてもあはれはさかたに

秋の月とあはれ橋をたれ都のさかたに  
何となくあつてもあはれはさかたに

月

秋の月とあはれ橋をたれ都のさかたに  
何となくあつてもあはれはさかたに

秋

秋の月とあはれ橋をたれ都のさかたに  
何となくあつてもあはれはさかたに





ついでに... 山家

山家

... 山家 ...

肥後

... 肥後 ...

... 述懐 ...

述懐

... 祝 ...

祝

... 祝 ...

いづらも此結とわくは所行此たうら山くたうら  
元此早後此まゆゆまうらつまゆゆ  
屋とらうらひまゆみりくまゆまゆ山山山

源百首和歌

押紙禁山平氏  
九條兼内大臣内百首

春

三三三

吉野山満る白雪のつゆのさるまゝとわくま

珠氷

まゆまゆ氷まゆまゆ此地乃まゆまゆ

去洞書

仙人此若此此のわらけ庭とひてうわらう白雪

原上をぬ

あまのこまはまはま此京の乃舞舞まひまは

まき原勢

うと後此夫の羽衣まままてままの袖まうらん

野宿梅

夕暮のたれ梅まき成まて常うら此ま

浦宿

浦宿まゆまゆまゆまゆ此京の乃舞舞まひまは

新着茶

まゆまゆ此結とわくまゆまゆまゆまゆ

戸外書

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは  
撰路書也

乃月十日より十日まで十日間をわが邦に招きよせしむるは  
去後月

乃月十日より十日まで十日間をわが邦に招きよせしむるは  
山家柳

采花の柳梅の枝をわが邦に招きよせしむるは  
深海局

海に花をわが邦に招きよせしむるは  
心有年速

いふはわが邦に招きよせしむるは  
去後月

人々をわが邦に招きよせしむるは

去後月

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは

去後月

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは

去後月

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは

水色は

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは

去後月

邦人といふ人々をわが邦に招きよせしむるは

夏









初冬

秋風月時多... 同指為樂

秋風月時多

秋風月時多

冬里月

秋風月

三輪乃山秋風月時多...

冬里月

海風月時多

秋風月時多

秋風月時多

秋風月時多

秋風月時多

秋風月時多...



わさ海のぬきあがりちりひられ山々緑花の海  
集一水意二首

うさくの中しりあつたれあつたれ  
うさくの中しりあつたれあつたれ  
うさくの中しりあつたれあつたれ

園海色

あつたれあつたれあつたれあつたれ

古後夜

あつたれあつたれあつたれあつたれ

鳥言鳥語

あつたれあつたれあつたれあつたれ

芳杜猿

藤のて結小物と衣を老花杜若乃とて

山家燈

身もえくみりしりあつたれあつたれ

古寺松

夕暮のしりあつたれあつたれあつたれ

阿多道書

山川れいれあつたれあつたれあつたれ

海懐舊

浪房りりあつたれあつたれあつたれ

曉神祇

秋花らりりあつたれあつたれあつたれ

秋天人愛



